

「一番線は電車がまいります。」の文法—係助詞『は』の代行機能再考—
‘ICHIBAN-SEN WA DENSHA GA MAIRIMASU.’
- SUBSTITUTABILITY OF THE LINKING PARTICLE, “WA,”
RECONSIDERED -

宮崎敬子
Keiko Miyazaki
サウスカロライナ大学
University of South Carolina

0. はじめに

日本語教育においては、いわゆる「主題」と「対比」の取り立て助詞と呼ばれる係助詞の『は』に関して、統語論だけでなく、語用論や談話分析の方面からも様々な研究がなされている。そこで、何を今さら『は』なのかということになるのだが、そもそも『は』と『が』の使い分けは日本語学習者にとって永遠の課題であり、『は』の格助詞代行機能がさらに学習者の混乱を招いている。本論では、敢えて『は』の代行を取り挙げ、その機能を様々なコンテキストに基づいて再考する。

最近、東京の営団地下鉄のホームで耳にする「一番線は電車がまいります。」というアナウンスの違和感が『は』に関する疑問を喚起した。そこで、「このようなコンテキストにおいて係助詞の『は』は現れにくい」という仮説をもとに、日本人母語話者二十人を対象に調査を行った。助詞のところを空欄にして被験者に埋めさせるという調査では、『は』よりも『に』の方がふさわしいという結果を得た。これは、到着点を表す格助詞の『に』によってマークされる語は主題になりにくいという定説（野田 1996 他）を証明することにもなるのだが、次に行ったアナウンスを聞く調査では、『は』に違和感を覚える被験者は多くはなかった。

この結果をもとに、どのような環境で係助詞『は』が格助詞『に』に代行できるのかということ、(1) 主題になりやすい成分／なりにくい成分、(2) 主題を持つ文になりやすい文／なりにくい文という視点から議論し、また、文の種類や機能からも検討する。

最後に、日本語教育において『は』の代行がどのように導入されているかについて、『なかま』、『げんき』、『SFJ (Situational Functional Japanese)』の三冊の教科書を検証する。

1. 問題提起：「一番線は電車がまいります。」の正誤

JR の電車のホームでのアナウンス「一番線に電車がまいります。」には感じない違和感が、営団地下鉄のアナウンス「一番線は電車がまいります。」には感じられる。この二つの文を並べて見れば、その違和感が、「一番線」という語の後に来る助詞の選択に関わっていることが一目瞭然である。確かに、『は』という係助詞は、特別な場合を除いて、到着点を表す格助詞の『に』に代行しない（野田 1996 他）。では、なぜ、このような不自然な文が実際に使われているの

だろうか。先に述べたように、日本人母語話者二十人への簡単なアンケート調査の結果、次の(1)の空欄に『は』を選んだ人はいなかった。全員が『に』を選んだ。

(1) 一番線 () 電車がまいります。 (選択肢：が、に、を、は)

それに対し、次の(2a-c)の文を音声で聞かせ、違和感があるかどうかを尋ねたら(2d)以外では、どの文に対しても違和感を感じると答えた人はほとんどいなかった。

- (2) a. 一番線、電車がまいります。
- b. 一番線に電車がまいります。
- c. 一番線は電車がまいります。
- d. 一番線が電車がまいります。

普段、どの文を聞き慣れているかということも影響するかもしれないが、少なくとも、「一番線は電車がまいります。」という文(2c)は、音声で耳から聞いた時には(それが単独でコンテキストを持たない場合)、自然に聞こえるということがわかった。ただし、この文は駅のホームのアナウンスとして実際に使われている文なので、ここで『は』→『に』の代行(到着点の名詞の主題化)が誤用かどうかを議論しても意味はない。本論は、この現象に正誤の判定を下すのではなく、ひとつの言語現象と捉え、その現象のメカニズムを解明することに目的とする。

2. 先行研究

初めに述べたように、係助詞の『は』については、いろいろな分野で数多くの研究がなされて来ている。特に格助詞の『が』との比較研究が多く見られ、主格を表す『が』に対して、『は』には主題と対比の二つの働きが認められている(久野 1978、Kuroda 1987 & 1992、Makino 1987、Maynard 1987、Miyagawa 1987 他)。しかし、この二つの働きは互いに他を排するものではない。主題をマークしながら、話者あるいは筆者が対比を強く打ち出したい時にも、そのまま『は』を用いる。その場合、主題を表す働きが薄れ、対比的な意味合いが強くなる。逆に、初めから対比を意識して『は』が用いられた時でも、その『は』によってマークされた語は必ず、その文の主題となるのだ。

- (3) a. 太郎ハ学生デス。
- b. 雨ハ降ッテイマスガ、雪ハ降ッテイマセン。 (久野 1978)

(3a)は主題、(3b)は対比の例である。(3b)の文は、「～ますが、…」という逆接の文型によって対比が明らかになっているが、下記の(4)のように主題と対比のどちらにも解釈され得る文もある。

(4) 太郎ハソノ本ヲ読ンダ。

(久野 1978)

(4) は、久野 (1978) によれば、単に「太郎に関する陳述」とも、「太郎は読んだが、花子は読まなかった」というように「太郎を他の人達と比較対照した陳述」とも受け取れる (p. 30)。前者の「太郎に関する陳述」と受け取った場合、この『は』は主題の『は』ということになり、後者の「他の人達との比較」と受け取った場合は対比の『は』ということになる。しかし、いずれの場合も「太郎」が主題であることに変わりはない。

また、否定文で『は』がよく使われることも指摘されて来た。それは「肯定」を前提としたうえで「肯定」対「否定」の対比と解釈されているが、同時に、談話・語用論的な要因も言及されている (McGloin 1987 他)。

(5) a. kusuri *o* nom-ana-katta.

b. kusuri *wa* nom-ana-katta.

(McGloin 1987)

例えば、「今朝、薬を飲んだでしょうね。」という確認の問いに対する答えとしては (5b) の「薬は飲まなかった。」がふさわしく、話者が突然思いついたような場合には、「(あ!いけない。) 薬を飲まなかった。」というように (5a) が適切である。すなわち、この「飲まなかった」という否定表現と対照をなす「飲んだ」という肯定表現が先行すると推測される場合には、対比の論理から係助詞の『は』が選ばれ、その対照となる肯定表現が見当たらない場合に格助詞の『を』が使われるのである (McGloin 1987: pp. 167-168)。

一方、主題の『は』に関して『が』との使い分けを論じる時だが、「主格 (主語)」の『が』に対して「主題」の『は』、『が』の「新情報」に対して『は』の「旧情報」という観点からの説明がある (久野 1978、Kuno 1984 他)。他に、『が』が用いられる文を「現象文」、『は』が用いられる文を「判断文」とする説明 (三尾 1948 & 1958) もある。これは、その後、言い換えられて、「現象描写文」と「判定文」 (仁田 1991) などと呼ばれることもある。主格名詞と述語の意味的な関係によって、『が』を「措定」、『は』を「指定」とする使い分けの原理を提案したのは三上 (1953/1972) で、Makino (1987) は、“CO (Communicative Orientation)”という観点から、『が』が“speaker-oriented”な語をマークするのに対して、『は』がマークする語は“listener-oriented”であると説明する。

上記の「新情報」と「旧情報」、「現象文 (現象描写文)」と「判断文 (判定文)」、「措定」と「指定」、「speaker-oriented」と“listener-oriented”などに代表される説明は、それぞれ違った観点からのものであり、文中に主題をマークする『は』が現れる現象のそれぞれ一部分を説明することはできるが、『は』登場のメカニズム全体を説明することはできない。全体をうまく説明するには、ただひとつの原理に頼るわけにはいかないようだ。まず、その文が対比を強く打ち出しているかどうか、次に、その文に含まれている格成分が主題になりやすい格成分かどうか、それから、その文自体が主題を持てる文であるかどうかなどについて

考えなければならない。次章では、これらの観点から「一番線は電車がまいります。」という文の可能性について論じる。

3. 「一番線は電車がまいります。」の可能性

3.1. 対比の可能性

JRの駅のホームでは、一般に、(6a)の「一番線に電車がまいります。」というアナウンスが流れ、助詞を省略した形で「一番線、電車がまいります。」と言うこともある。これに対して、営団地下鉄の駅のアナウンスでは、(6b)の「一番線は電車がまいります。」のように、プラットホームの番号に続く助詞が到着点を表す格助詞の『に』ではなく主題／対比を表す係助詞の『は』となっている。

- (6) a. 一番線に電車がまいります。 (JR)
b. 一番線は電車がまいります。 (営団地下鉄)

話者が対比を強く打ち出したい場合、例えば、「二番線には電車は来ないが、一番線には来る」ということを意図しているような場合には(6b)は自然に聞こえるかもしれないが、駅のホームでそのような状況は起こりにくい。駅のホームで電車を待っている人に電車の到着を伝えるアナウンスとしては、(6a)が自然である。このアナウンスの聞き手は二番線でも三番線でもなく、一番線で電車を待っている人々なのだから、彼らには一番線と二番線を比較対照する必然性も、必要性もないはずだ。従って、通常の駅の業務に関する限り、この文に対比の可能性はないと言ってよいだろう。

3.2 「一番線」の主題化の可能性

3.2.1 主題になりやすい／なりにくい格成分

『は』が『に』に代行するということは、すなわち、格助詞の『に』がマークする到着点を表す名詞が主題化するということである。そこで、「一番線に」の「一番線」が主題化して「一番線は」になる可能性を見てみたい。

まず、主題になりやすい格成分となりにくい格成分という観点から見れば、一般に、主格を表す語は主題になりやすく、到着点を表す語はなりにくい。野田(1996)は、やや不自然な例として、下記の文を挙げている。

- (7) ? 神戸には5時ごろ選手たちが着きます。 (野田 1996)

その理由は説明されていないが、次に、同じような例として(8)の文を挙げ、「東京(到着点)」の方が「沢田(主格)」より、「行った(述語動詞)」との結びつきが強いため、特別な事情がない限り、「東京」を主題にはしにくいと述べている(1996: pp. 25-26)。(『へ』と『に』は到着点／目的地を表す場合にはほぼ同じように使われるので、ここで『へ』を含む文を例証に用いても、問題はない。)

(8) 東京へは／／沢田が行った。

(野田 1996)

言い換えれば、「沢田は東京へ行った。」なら、無理がないということである。野田 (1996) は格成分と術語動詞との結びつきに注目し、「基本語順で前の方にあるものほど主題になりやすい (p. 26)」と説明する。それぞれの基本語順 (矢澤 1992, 野田 1996 他) は、(7) が「5時ごろ選手たちが神戸に着きます。」で、(8) は「沢田が東京へ行った。」である。どちらも到着点を表す名詞は文の前の方ではなく、述語動詞の直前にあり、述語動詞との結びつきが強いことが明らかである。

次の到着に関する文の例にも、同様の原理が働いていることが見て取れる。

(9) a. トム・クルーズが東京に来ました。

b. トム・クルーズは東京に来ました。

c. ?東京 (に) はトム・クルーズが来ました。

(9a) が基本語順の文で、この文の「トム・クルーズ (主格)」を主題化しても、非常に自然な (9b) の文となるのだが、「東京 (到着点)」を主題化すると、(9c) のように、格助詞の『に』を残しても残さなくても、不自然な文ができ上がる。これは、野田 (1996) の説明にあるように、基本語順とそれぞれの格成分 (「トム・クルーズ」と「東京」) と述語動詞 (「来ました」) との結びつきの強さによるものである。(9a) の文は、いわゆる「基本語順」に沿って、述語動詞と結びつきの強いものから述語動詞の前に置いていくという方法で作られている。従って、「東京」の方が「トム・クルーズ」より、述語動詞との結びつき強いということがわかる。述語動詞との結びつきが強い格成分は、語順では、述語動詞に近いところにあり、主題になりにくい。一方、述語動詞との結びつきが弱い格成分は述語動詞から遠いところにあり、主題になりやすいというのである。言い換えれば、主格を表す語は一般に述語動詞から遠いところにあるので、意味の上で述語動詞との結びつきが強くなければ、主題になりやすい格成分なのである。到着点を表す語は、普通、述語動詞に隣接するし、意味の上で述語動詞 (この場合、動詞は必ず「行く」や「来る」などの移動を表す動詞) との結びつきも強いので、主題になりにくいというわけである。

では、「一番線は電車がまいります。」について、その基本語順を考えてみよう。たとえ到着点を表す語であっても、述語動詞との結びつきが強くなければ、あるいは、他にもっと強い語があれば、主題となる可能性があるかもしれないのだ。つまり、基本語順が (10a) で、主格 (動作の主体) の「電車」と述語動詞の「まいります」の結びつきが強いのであれば、「一番線」は主題になりやすく、「一番線は電車がまいります」という (10b) の文ができ上がる。

(10) a. 一番線に電車がまいります。

b. 一番線は電車がまいります。

一方、到着点の「一番線」と述語動詞の「まいります」の結びつきが強く、基本語順が(11a)のようであれば、主格の「電車」が主題になりやすく、(11b)の「電車は一番線にまいります。」という文が可能となる。

- (11) a. ?電車が一番線にまいります。
b. ?電車は一番線にまいります。

しかし、(11a)の文自体、駅のホームで聞いたら不自然に聞こえる。電車以外のものが一番線に来ることはまずないからである。「電車は一番線にまいります。」という(11b)の文も、駅のホームで聞いたらさらに不自然に聞こえる。

3.2.2 主題を持てる／持てない文

上記(11b)の文が不自然なのは、その場で知覚したできごとをそのまま表すような述部を持つ文は、一般に、主題を持たない文になりやすい(野田 1996)からで、「見える」、「聞こえる」、「匂う」、「来る」のような動詞を含む述部がこれに相当する。こういった文では、主格を表す語(主語)が主題化することはまずない。例えば、素敵な音楽が聞こえている時、(12b)ではなく、(12a)の文が使われるのはこのためである。

- (12) a. ああ、いい音楽が聞こえますね。
b. *ああ、いい音楽は聞こえますね。

駅のホームのアナウンスも、電車の到来を告げるものであれば、当然、今そこで起こっていることについてであるから、主題を持たない文になりやすい。ゆえに、主格を表す「電車」は主題になりにくく、(11b)の「電車は一番線にまいります。」が不自然に聞こえるのである。

さて、「一番線は電車がまいります。」という(6b & 10b)の文を、「一番線」という主題を持つ文として認めようとするなら、(10a)の基本語順に沿った文をもとに、上述のように、「電車」と「まいります」の結びつきの強さという点から説明するしかない。つまり、本来、到着点を表す語は述語動詞との結びつきが強いはずなのだが、実はこの文においては主格名詞(主語)ほど述語動詞との結びつきが強くはないのだということを指摘して、「一番線」が主題になる可能性を示唆するのである。

4. 「一番線は電車がまいります。」の違和感

さて、前節で議論したように、「一番線」が主題となることが論理的には可能だということがわかって、やはり、この文には違和感が残る。そこで「一番線」という語を主題化する前の「一番線に電車がまいります。」という文を、果たして「一番線」が本当に主題なのかということを中心に、もう一度、検討してみたい。

文の主題というのは、その文が伝えている、あるいは伝えようとしていることであるから、この文の主題は「電車」や「一番線」ではなく、むしろ、「電車が来ること」なのであり、それがそもそも、この文の主題となるはずのものなのではないか。

(13) 一番線に電車がまいります (こと)
主題

その場合、上記 (13) の主題の部分に主題を明示する『は』をつけて、(14) のような文が可能となる。

(14) 電車がまいりますのは一番線です。

もうひとつ考えられるのは、主題を明示する『は』がつかずに、もとの (10a) の形がそのまま残って、下記の (15) のような文になることである。

(15) 一番線に電車がまいります。 (10a) に同じ。

今、ここで問題としているのは、何が文の主題になるのかということである。もし、格成分の「一番線」が主題に選ばれるなら、自動的に、営団地下鉄の駅のホームで実際にアナウンスされている (6b) の「一番線は電車がまいります。」という文となる。(13) のように述部が主題として選ばれた時には、上記の (14) か (15) のいずれかになる。この場合、(14) の文があまりに非現実的なので、もっとわかりやすい例として次の文を検証してみよう。

(16) 父がそう言った。

(16) は「一番線に電車がまいります。」と同じく、述部が動詞から成る動詞文で、主題はその述部、すなわち、「そう言った (こと)」である。

(17) 父がそう言った (こと)
主題

このように、述部が主題の文では、主題を明示するか暗示するかによって、次の二通りの文の形が現れる。(18a) の文が係助詞の『は』によって主題を明らかに示しているのに対し、(18b) の文は格助詞の『が』をそのまま残して主題を暗示する。

(18) a. そう言ったのは父だ。
b. 父がそう言った (のだ) 。

(18a)の方が(18b)よりも自然に聞こえる。この文の主格名詞(主語)は「父」で、この例に限って言えば、特に話の現場や前の文脈に存在してはいない。しかし、もし主格名詞が話者の目の前に存在したり、前の文脈に存在したりする場合は、少々、様子が違って来る。

- (19) a. 今、この皿から魚を盗ったのはあの猫です。
b. 今、あの猫がこの皿から魚を盗ったんです。

(19b)の主題を暗に示している文の方が、主題を明示している(19a)より、よく使われる。他に、主格名詞が疑問詞の場合も同じように、主題を暗示する文(20b)の方が好まれる。

- (20) a. 今、この皿から魚を盗ったのはだれですか。
b. 今、だれがこの皿から魚を盗ったんですか。

駅のホームのアナウンスの場合、話し手も聞き手も現場にいる。電車はまだ来てはいなくても、すぐそこに近づいている。まさに来ようとしている。この状況で「電車が来る」ことを伝えようとしたら、主題を暗に示して「一番線に電車がまいります。」という形の文を選択するのが最も自然だろう。従って、基本語順の原理に基づいて、到着点を表す「一番線」と述語動詞の「まいります」の結びつきの弱さという観点からうまく説明できたとしても、「一番線」を主題化した「一番線は電車がまいります。」という文は、どこか耳障りなものとなってしまうのである。そして、それこそが、この文を駅のホームで聞いた時の違和感の正体なのだ。そもそも、電車が来ることを伝えるアナウンスで、主題であるべき「電車が来ること」が無視され、「一番線」という語が係助詞の『は』と共に主題として聞こえてくるために、違和感が生じるのである。

5. まとめ

通常、格助詞の『に』がマークする語が到着点を表す語であった場合、主題化しにくい。言い換えれば、主題と対比を表す係助詞の『は』によって代行されることはない。これには、いわゆる到着文に用いられる動詞(「来る」や「着く」など)と到着点を表す格成分との結びつきの強さが関わっている。しかし、「一番線に電車がまいります。」という文で、述語動詞の「まいります」と強く結びついている格成分は、主格の「電車」の方で、到着点の「一番線」ではない。しかも、基本語順で前の方に置かれる格成分は文の主題になりやすいという観点からも、述語動詞から一番離れたところ(文頭)に位置している「一番線」は主題になりやすい。そこで、「一番線に電車がまいります。」という文の到着点を表す格助詞の『に』に主題の係助詞『は』が代行して、格成分である「一番線」の主題化が行われる。このように説明すれば、「一番線は電車がまいります。」という文に問題はなさそうなのだが、それでも依然、違和感が残る。

格成分と述語の結びつきを検証した時、「電車」の方が述語動詞の「まいります」と強く結びついているので、この語は主題にはなりにくく、もうひとつの格

成分の「一番線」の方が主題になりやすいと考えた。しかし、主題になりやすいからといって、それが必ずしも主題になるとは限らない。むしろ、ここで「電車」と「まいります」の結びつきの強さが示すものは、この文の主題が「一番線」でも「電車」でもなく、実は「電車が来ること」、すなわち、述部の「電車がまいります（こと）」だったのだということではないのか。本来、主題であるべきはずの「電車が来る（まいります）こと」が主題とならず、そのまま陳述のような形で述部に残ってしまったことが、「一番線は電車がまいります。」という文の違和感の原因となったのである。しかし、「電車が来ること」を主題として明示するには、「電車がまいりますのは一番線です。」という、あまり使われない文を用いなければならない。格成分と格助詞をそのままにして主題を暗示する「一番線に電車がまいります。」という形の方がずっと自然に聞こえる。JRなどが実際に駅のホームのアナウンスに用いているのもこの文である。

この「本来使われることにはなっていないところに『は』が代行して使われている」現象を、何らかの言語変化の一端と捉えるのは性急過ぎる。同様の現象の例が他に見つかっていないし、単なる誤用という可能性の方が高い。本論では、この現象をひとつの言語現象として捉え、説明を試みた。もし、この現象が単なる誤用であるなら、直に消えてなくなるかもしれない。しかし、言語変化というのは、例えば「ら抜き言葉」のように、誤用の蓄積から生じることが多いというのも事実である。もし、この現象が言語変化の一端を担うものなら、今後、どこかで新たな展開が見られるだろう。

6. おわりに

以上、述べて来たように、『は』と『に』の使い分けにはいろいろな要素が絡み、母語話者の間でもゆれが生じることがわかった。このゆれが日本語学習者の助詞の習得に直接影響を与えることはないだろうが、そうしたゆれが生じること自体に、助詞の使い分けが単純作業では済まないことを再確認させられる。

語学の学習が単純なものから複雑なものへと段階を経て学んで行くのを理想とするのなら、日本語の教科書は理想的とは言えない。一般的な日本語の教科書では、まず、第一課で係助詞の『は』が登場するからである。

- (21) a. たなかさんはさんねんせいです。 『なかま 1a』 第一課 (p.46)
- b. せんもんはにほんごです。 『げんき I』 第一課 (p.14)
- c. シャルマさんは学生です。 SFJ (Vol. 1: Notes), Chap. 1 (p.8)

(21a-c)は、アメリカの大学でよく使われている日本語教科書の例である。いずれも、最初に登場する文型が「XはYです」型であるため、助詞も『は』が真っ先に登場することになる。係助詞の『は』は、話者が何を主題に取り挙げてこれから話をしようとしているのかを表す、取り立て助詞である。『は』は話者の気持ち次第で、いろいろなものを取り立てる。営団地下鉄の駅のホームで聞こえるように、到着点さえ取り立ててしまうほど、極めて守備範囲の広い助詞である。

これに対して、格助詞を用いた文は、例えば「Xが+述部」のように、文の基本的な骨組を示すものであり、話者の気持ちに左右されない。まず、文の基本的な骨組を学んでから、話者の気持ちが反映されている文を学ぶ方が、「単純」から「複雑」への道を正しく辿ることになる。しかし、主格を表す格助詞の『が』が本格的に登場するのは、たいてい存在文を学習する課（『なかま』では第3課、『げんき』と『SFJ』では第4課）である。それ以前に、主語や疑問詞といった文法事項の説明の時に紹介されることはあっても、『が』が『は』より早く導入されることはまずない。

問題は、学習者が『は』を主格の格助詞と思い込み、それを引きずったまま、中級から上級へと進んで行くことである。それを防ぐために各教科書が工夫しているのは、早いうちに『は』が主題であって、主格（主語）ではないことを示すことである。例えば、(22a-b)のように、目的格の『を』に『は』を代行させて、主題化する。

- (22) a. しゅくだいはあしたします。 『なかま 1a』 第三課 (p. 116)
b. 手紙はだれが出しましたか。 *SFJ (Vol. 1: Notes), Chap. 2 (p. 36)*

『げんき』では(24)のように、時を表す格助詞の『に』に『は』を代行させて、『は』が必ずしも主格を表すのではないことを暗に示している。

- (23) メアリーさん、週末はたいてい何をしますか。
『げんき I』 第三課 (p. 63)

(22)、(23)のいずれの例も、存在文によって『が』が導入される前に学習するようになっている。しかし、初級の段階では、主格が主題化されて『は』で示されているような文型の方が、主格を『が』で示している文型より圧倒的に多いので、『は』を主格と考えてしまっても無理はない。学習者は、(24a-b)のような存在文の『が』と『は』、(24c)のような疑問詞を用いた疑問文などを経験して、初めて『は』と『が』の使い分けに困惑するようになる。

- (24) a. この辺に図書館がありますか。
b. 図書館は駅の前にあります。
c. Q: テニスは誰がしますか。
A: 田中さんがします。

しかし、これは単に『は』と『が』の対立の問題ではなく、学習者にとっては『は』も『が』も『に』も『を』も使い分けが難しいのである。そこで、教える側としても、できるだけ学習者の混乱を避けるために、「主題」と「主題でないもの」の対立と格の対立を区別して確認しておく必要がある。そのうえで、格成分はすべて主題になり得るが、なりやすいものとなりにくいものがあることも確認した方がいい。実際に教える時には、説明も必要だが、むしろ、現実的なコンテキストに則った対話や物語の一部などを音声で聞かせながら、助詞の部分の穴

埋め練習などをさせるのも効果的な方法のひとつである。文字だけではわかりにくい文法も、音声の持つ情報を利用することによってわかりやすくなる場合があるからだ。こうした練習を繰り返していくうちに、どの助詞が選択されるか納得するようである。最後に、その練習の例をひとつ紹介しよう。

(25) 練習

- 日本語プログラム事務室で -

A : すみません。こちらに日本語の先生 () いらっしゃいますか。

B : 私 () 日本語の鈴木ですが、どちらさまでしょうか。

A : あ、私 () キムともうします。

答 : は、が、は

参考文献

<言語学・日本語学・日本語教育>

石綿敏雄 (1999) 『現代言語理論と格』、ひつじ書房、東京.

久野 暉 (1973) 『日本文法研究』、大修館書店、東京.

----- (1978) 『談話の文法』、大修館書店、東京.

国立国語研究所 (1978)、『日本語の文法 (上)』、大蔵省印刷局、東京.

----- (1981)、『日本語の文法 (下)』、大蔵省印刷局、東京.

仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』、ひつじ書房、東京.

野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』、くろしお出版、東京

堀口和吉 (1995) 『一は一のはなし』、ひつじ書房、東京.

三尾 砂 (1948) 『國語法文章論』、三省堂、東京.

----- (1958) 『話しことばの文法』、法政大学出版局、東京.

三上 章 (1953/1972) 『現代語法序説—シンタクスの試み—』、刀江書院 (復刊、くろしお出版)、東京.

----- (1960) 『象ハ鼻ガ長イ』、くろしお出版、東京.

----- (1963) 『日本語の論理』、くろしお出版、東京

矢澤真人 (1992) 「各の階層と修飾の階層」、『文藝言語研究 言語篇』 21 (pp.53-70)、筑波大学.

Hinds, J., S. K. Maynard and S. Iwasaki (1987) *Perspectives on Topicalization: the Case of Japanese 'wa'*, John Benjamins, Amsterdam.

Kuroda, S.-Y. (1992) *Japanese Syntax and Semantics*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.

Makino, S. (1987) 'How Relevant is a Functional Notion of Communicative Orientation to *Ga* and *Wa*?' in Hinds, J, Maynard S. K. and Iwasaki, S. *Perspectives on Topicalization: the Case of Japanese 'wa'*, pp. 293-306, John Benjamins, Amsterdam.

McGloin, N. H. (1987) 'The role of *wa* in negation,' in J, Maynard S. K. and Iwasaki, S. *Perspectives on Topicalization: the Case of Japanese 'wa'*, pp. 166-183, John Benjamins, Amsterdam.

Tateishi, K. (1994) *The Syntax of 'Subjects'*, CSLI Publications, Stanford & Kuroshio

Publishers, Tokyo.

<日本語教科書>

筑波ランゲージグループ (1996) *Situational Functional Japanese Volume 1: Notes (Second Edition)*、凡人社、東京.

----- (1999) *Situational Functional Japanese Volume 2: Notes (Second Edition)*、凡人社、東京.

----- (2006) *Situational Functional Japanese Volume 3: Notes (Second Edition)*、凡人社、東京.

Banno, E., Y. Ono, Y. Sakane and K. Shinagawa (1999) *Genki I: An Integrated Course in Elementary Japanese*. Japan Times, Tokyo.

----- (1999) *Genki II: An Integrated Course in Elementary Japanese*. Japan Times, Tokyo.

Hatasa, Y. A., K. Hatasa and S. Makino (2009) *NAKAMA 1a: Instructor's Annotated Edition*, Houghton Mifflin Harcourt Publishing Company, Boston.

----- (2009) *NAKAMA 1b: Instructor's Annotated Edition*, Houghton Mifflin Harcourt Publishing Company, Boston.